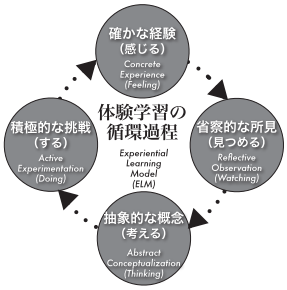
他者とともに学ぶサービスラーニング

共通教育推進機構　准教授　山口　洋典

フィールドとデスクを往復するサービスラーニング

阪神・淡路大震災が発生した1995年１月、私は理工学部環境システム工学科の１回生でした。BKCの１期生の私は、同じく１期生だった政策科学部の学生らが中心となった「立命館大学ボランティア情報交流センター」の立ち上げに参加しました。若くて体力もあるから「何かできる」と思い、とにかく現地に駆けつけました。しかし、風景が一変してしまったまちで「何ができる」のか、すぐには言葉になりませんでした。



サービスラーニングも含めた「体験学習の循環過程」：ジョン・デューイやクルト・レヴィンらの視点をもとにデイヴィッド・コーブが提示した教育の哲学である。（訳は筆者）

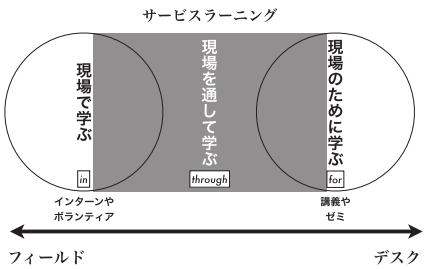
震災ボランティアでは「思考」と「実践」のバランスが重要だと身にしみて学びました。まず動いた後、立ち止まって考える、そしてまた動いて、また振り返って次の動きを考える、これを繰り返したためです。今思えば、こうして頻繁に机と現場とを往復する中で、目の前の他人（現前する他者）と、自分の中の他人（無自覚の自己）の両方に向き合っていました。そして、教科書では学べないことを学び、成長を実感できたのです。

このような大学と大学以外での学びを接続する学び方は「サービスラーニング」と呼ばれています。正課科目だけでなく、課外活動でも、こうした学びが注目されています。ちなみに、ボランティアやインターンシップと異なるのは、他者と共に学びのコミュニティを形成して問いを深める、集団による学び方であるという点です。そして、現代を生き抜く知恵を磨いていく教養教育の一環として、立命館大学でも積極的に進めています。

自己完結から他者連結の学びへ

中学、高校とテニス部だった私は、サービスラーニングはテニスに似ていると説明しています。まずサービスを相手のコートへ打たないと、やりとりが進まないのです。先程の「机と現場とを往復する」という表現を重ねると、机に座ってどうすればよいか考えた私が、現場に打ち込んでいく、そして現場から返ってきたボールをまた返していく、そんなやりとりを重ねるのがサービスラーニングです。

ただし、実践を通じた学びとは、現場の相手を打ち負かす勝負事ではありません。もちろん、思考を研ぎ澄ますために机の上で激しく討論（ディベート）する、それぞれの価値観を調整し共有するために現場で熱く議論（ディスカッション）することもあります。ただ、討論も議論も、何より実践の現場でも、自分が正しいという思い込みを相手に押しつけては、互いによい関係を産み、育て、続けていくことは困難です。テニスで言えば、サービスエースばかり狙っては、そもそも枠から外れること（フォルト）の可能性が高まり、やがて相手は打ち返す気持ちが萎えるでしょうし、逆に「自分の答えは正しいだろうか？」「空気を読まないと…」などと引っ込み思案になって相手にボールを打



サービスラーニングという学習方法の構図：サービスラーニングはフィールドでの学び（現場での学び）とデスクでの学び（現場のための学び）とが橋渡しされた学び方である。

京都でのサービスラーニングの例「時代祭応援プロジェクト」（平安構社第八社を通じて、維新勤王隊・江戸時代婦人列への参加）：1895年「京都の誕生日」を祝うために始まった、葵祭・祇園祭に並ぶ「京都の三大祭」の一つに2006年から、衣装の虫干し、楽器演奏や隊列行進の練習の受付補助を経て、当日の運営と終了後の片付けに携わる。

ち返さない場合も、ラリーが続いていきません。

サービスラーニングという学び方についての研究は英語圏で先行しています。特にメリーランド大学のバーバラ・ジャコビーが示した「省察（reflection）」と「互恵（reciprocity）」が学びの鍵という概念は日本でもよく知られています。こうした他者と共にある学びは次第に着目され、1999年３月に文部省高等教育局（当時）が「大学教育におけるボランティア活動の推進について」をまとめて以来、各大学で実践と研究が進みました。実際、立命館大学も、2005年の文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラムへの採択を前後して、各種のプロジェクトが展開されてきています。

生徒から学生への飛躍を支える「生活者」の視点

立命館大学がサービスラーニングを進めているのは、学習者が中心となる学びの実現のためです。教育者が中心となった一斉の講義形式の対極にある学び方です。たとえば、衣笠キャンパスでは「時代祭」、びわこ・くさつキャンパスでは旧草津川での「街あかり」、大阪いばらきキャンパスでは「こどもの貧困」の活動など、地域社会の動きに携わり、チームワークを築いていきます。そして、約半年にわたってフィールドとデスクを往復し、多様な人間関係を結びながら、自分を磨いていきます。

高校時代までは「生徒手帳」があり、与えられた「時間割」のもとで教えられる環境に身を置いてきたと思われます。これはテニスで言うところのレシーブの練習にあたります。自分に向いてきた問いに、どんな答えを出すかが問われるためです。ちなみに読書やノートの整理などの自習は、さしずめ壁打ちにあたるでしょう。

高校までの「レシーブ型」の教育、大学での「サービス型」の学習、その間を結ぶ「壁打ち」型の自習、これらがうまく重なると、学習者に生活者の要素が織り込まれます。それは現場に対して「何をどう学ぶか」と問いかける中で、現場からは「誰となぜ生きていくのか」といった人生の目的や目標が問われるためです。つまり地域という学びの場では、教える側と教わる側という固定的な関係はなく、むしろ多様な人間関係を結びながら、お互いに大事な場所の未来をよりよいものにしていくことで、結果として学生は「生活者の見方」を身につけると共に、外から来た者だからこそ気づく視点を現場の方々に投げかけることになります。多彩な関係性の中での学び方、サービスラーニングにより、実践的に学ぶ立命館大学生が増えることを願っております。

草津でのサービスラーニングの例「草津街あかり・華あかり・夢あかりプロジェクト」（草津市役所商業観光課を通じて、草津街あかり・華あかり・夢あかり実行委員会に参加）：道路面よりも河道が高い「天井川」の一つとして全国に知られてきた草津川が、2002年に治水事業によって廃川となった後、河道をろうそくの灯りなどで彩る「草津街あかり・華あかり・夢あかり」が2004年から始まり、講義科目でのボランティア参加を経て、2010年から通年のプロジェクト化された。